

# 中世寺院創建譚の創出と勸進

貝 英 幸

## 〔抄 録〕

室町期に行なわれた近江国百済寺の再建復興活動および勸進活動に際して作成された勸進願文を題材にしながら、願文にみえる創建譚を検討する。特に創建の逸話には、創建譚創出時の同寺を取り巻く社会的な状況が反映していると考えられることから、勸

進願文の検討を通じて同寺創建譚創出の事情および背景を探る。

キーワード 聖徳太子信仰、百済寺、私年号、創建伝承

## はじめに

室町期の勸進は、念仏や誦経を勧めて仏道に勧め入れたり、費用を奉獻した人びとを仏道に導き入れ作善をなさしめるという本来の意味から転じ、寺社の再建にあたりその費用を募ることに主眼が移り、やがては寺院や仏像の新造あるいは修復・再建のため浄財の寄付を求めることを指すようになっていくことはよく知られている<sup>1)</sup>。勸進に際して作成される勸進願文も、寺院再建に際して浄財の寄付を募ることを目的とするようになり、その内容には単に勸進の趣旨や目的を記すにとどまらず、浄財の寄付を獲得するというねらいにもとづいた工夫が

加えられるようになる。そうした工夫の一つとして、勸進を行う寺社の創建についての逸話、つまりは創建譚があげられる。

そもそも勸進願文の内容には、勸進のねらいや勸進活動を担う人々の特徴など、勸進の背景ともいえる事柄が反映し、さらには願文作成時の社会的な状況や、実際の勸進のありようも願文毎の特徴や差違となって現れる。では、願文に加えられる創建に関する逸話はどうか。仮に創建譚が架空の逸話を編んだものであったとしても、逸話を含んだ創建譚には創出時の寺社を取り巻く状況が反映しているのではないだろうか。

本稿が対象とする近江国百済寺は、六〇六年（推古天皇十四）の創

建と伝えられる一方で、同寺に関する文献史料は、寺伝が伝える創建年からは実に五〇〇年以上の期間が空白である。残念ながら現存する史料からはそうした同寺草創当初の事情をうかがうことは困難であるばかりか、寺伝が述べる同寺創建の逸話は史実とはいえない<sup>②</sup>。

すなわち、現在同寺に伝えられている創建譚は、創建の後いつかの時点において創出されたものである。確定はできないものの、おそらくは室町期の勸進が創出に大きく影響しており、少なくとも伝承化していた創建譚を書き記したものとしては、本稿がとりあげる勸進願文以外には考えられない。

そこで本稿は、室町期の近江国百済寺の再建復興を契機に作成された勸進願文を題材にしながら、そこにみえる創建譚の検討を通じて、同寺創建譚創出の事情を検討する。

## 第一章 百済寺の焼亡と再建復興

百済寺は、「東寺略年代記」久安元年（一一四五）条<sup>③</sup>を初見に、史料上にその姿を現す。しかしながら、同寺の初期についての史料は乏しく、その後は『源平盛衰記』に寿永二年（一一八三）七月のこととして、平氏追討のため上洛を目指していた木曾義仲軍の要請に応じ、百済寺が兵糧米を供出した記事<sup>④</sup>が知られるほか、建暦三年（一二一二）二月に、天台座主慈鎮（慈円）によって記された「慈鎮所領讓状案」<sup>⑤</sup>、その後の天福二年（一二三四）八月に慈源によって記された「慈源所領注文」<sup>⑥</sup>にその名がみえる程度である。それらの史料からは、

平安から鎌倉期にかけての百済寺が、「天台別院」と号し無道寺との関係を有していたことが推測されるのみでしかなく、創建以降の変遷はもとより、規模や組織などの詳細についても明らかにするほどの材料はなく、もっぱら平安鎌倉期の同寺のありようについては、永正年間頃の成立とされる「百済寺古記」<sup>⑦</sup>の記述によらざるをえないのも首肯せざるをえない。

近年「無量寿院大般若経」<sup>⑧</sup>に収められる経巻の奥書によって、尾根筋毎に点在する僧房が四十七を数え、それら僧房が東谷・西谷・南谷・北谷と呼ばれたという「百済寺古記」が記した中世の同寺の姿について、一応の確認はされたとはいえ、上述した同寺についての理解が大きく進展したわけではない。

ところで、こうした古代から中世にかけての百済寺の歴史を概観する時、同寺が経験した数度の火災は同寺の歴史のなかでも特筆される事項であるとともに、本稿が対象とする同寺創建譚の創出とも大いに関係している。確認しておこう。

鎌倉期から室町・戦国期にかけて、百済寺は都合五回焼亡している。すなわちそれは、文永十一年（一二七四）、明応元年（一四九二）、明応七年（一四九八）、文亀三年（二五〇三）、元亀四年（一五七三）であるが、残された史料からは以下のような詳細が判明する。

まず鎌倉期の焼亡は概ね次の通りである。

文永十年癸酉五月日ヨリ八月マテ大日本世間皆損、次年飢食、百済寺<sup>㍑</sup>「炎上<sup>㍑</sup>」八十余家焼了。

文永十一年甲戌三月十日子時也。三ヶ年之内造立供養了。<sup>9)</sup>

文永十一年<sup>申</sup>亥三月十一日子時百済寺焼了。堂・塔・房八十余也。<sup>10)</sup>

引用した二点の史料は、「無量寿院大般若経」五三九巻と四四七巻の奥書部分であるが、そこには同寺焼亡に関する記載がみられる。記事自体は干支に誤記や文言の挿入や抹消がみられるほか、五三九巻の記載は、文永十・十一年（一二七三・七四）の二年に及ぶ事項が一筆で記されているところからみて、後記されたものと推察される。とはいえ、同巻に記された「大日本世間皆損」は、文永十年の五月から七月にかけて発生した大規模な炎旱を指していると考えられることから、記載の内容自体は概ね事実と考えて問題ないものと思われる。これにより、百済寺は文永十一年に焼失したものの、三ヶ年の間に再建が行われたとしてよいだろう。

次に室町期の焼亡である。まず、明応元年（一四九二）の焼失は、「大乘院寺社雜事記」同年八月二十二日条に、

進発江州百済寺、悉以焼払之云々、<sup>11)</sup>

とあることによつて判明する。六角氏討伐を目指した二度目の近江出兵に際して、百済寺付近に進軍した將軍足利義材が同寺に火を懸けたことが原因と思われる。火災の規模など詳細は不明だが、同寺では長享元年（一四八七）十月に行われた最初の近江出兵の際にも陣が立てられており、戦闘に伴う火災であつたと考えてよからう。

次いで、明応七年の火災は、失火によるものと思われる。焼亡のの

ち百済寺衆徒から朝廷に提出された申状は、出火炎上の様子を次のように伝えている。

#### 江州百済寺衆徒等謹言上

右当寺者 勅願無双之靈地有縁之梵場也、然今月七日卯刻風雨之時節、猛火出現、本堂并常行三昧・阿弥陀堂・太子殿・五重一切經輪藏、其外諸堂悉回録候畢、言語道断次第也、不知火之由来、希代天災、歎而有余乎、国中度々大乱無此災今不慮逢此難事、時尅到来歟、殊本堂本尊十一面觀音者、聖德太子御作也、奉取出之处、御指一損失權作、輒難奉修造、早蒙 勅許可致其沙汰也、仍衆徒等誠惶誠恐謹言、

明応七年八月日<sup>12)</sup>

明応七年八月七日、百済寺は風雨の折りに突如出火し、本堂以下諸堂が悉く焼失したことが述べられている。申状ではこの出火の原因を「不知火」とし、混乱する社会の到来を予感させる事態と述べている。

次の焼失は、文亀三年（一五〇三）四月三日、原因は伊庭貞隆の乱によるものである。文亀二年十月、六角氏守護代伊庭貞隆がかねてより対立していた六角高頼に叛旗を翻したことから、幕府管領細川政元や山内氏が京都から参陣する事態へと発展した。伊庭氏の拠点のひとつであつた百済寺は、<sup>13)</sup> については文亀三年四月三日、その余波をうけ同寺一帯とともに焼失した。

最後に、元亀四年（一五七三）の百済寺焼亡は、百済寺最後の焼亡

であると共に、それまでの火災のなかでも最も大規模な火災であったとされる。この焼亡は百済寺全山焼亡とされ、上洛中であった織田信長によるものである。その様子を、「信長公記」元亀四年四月七日条は、

四月七日、信長公御帰陣。其日ハ守山ニ御陣取。是より直に百済寺へ御出。二三日御逗留有て、鯉江之城に佐々木右衛門督被盾籠、攻衆人数佐久間右衛門尉・蒲生右兵衛大輔・丹羽五郎左衛門尉・柴田修理亮に被仰付、四方より取詰、付城させられ候、近年鯉江之城百済寺より持續き、一揆同意たるの由被及聞食、四月十一日、百済寺堂塔伽藍坊舎悉灰燼なる。哀成様不被当目。<sup>14</sup>

かねてから在洛中であった織田信長が、佐々木右衛門督（六角義治）の立てこもる鯉江城攻略を目指して守山へ出陣し、そこより鯉江城攻略の命を発していたが、百済寺が同城への援助を行っていたことを聞き及ぶや、同寺堂塔伽藍坊舎を悉く焼き払ったというものである。この火災により百済寺は全山焼亡し、その全てが灰燼に帰したとされる。

以上が鎌倉期から室町・戦国期にかけて百済寺が罹災した火災であるが、これらのうち本稿の対象となるのは、明応七年と文亀三年の二度の火災である。この両度の焼亡では、その直後より再建が計画された。例えば、明応七年を例にとれば、火災直後百済寺衆徒から提出された言上に対しては、次のような文書が発給されている。

「散書也、八月十六日」

あふみの百済寺、この月九日、雨風の時、本堂のうはの堂より火出候て、本堂以下一ものこり候ハすやけ候、なにととも火の由来は存知候ハぬよし申候、三百坊の在所にて候坊舎ハ一もやけ候ハぬよし申候、本尊修造の勅裁を下され候へと、かやうに申候御心得候て、御披露候へく候申、かしく

勾当内侍とのへ

御局へ<sup>15</sup>

（中御門宣秀）  
のふ秀

当寺諸堂悉焼失事、所被驚思食也、本尊無為尤以神妙、早奉補尊像之損、可專伽藍之再興者 天氣如此、悉之以状、

明応七年八月十六日

（中御門宣秀）  
左中弁判

百済寺衆徒<sup>16</sup>

すなわち百済寺よりの言上をうけた朝廷では、左中弁中御門宣秀によつて事態が披露され、即座に後土御門天皇の綸旨が発給された。史料からは、伽藍の再興とともに火災の混乱に際して破損した本尊の修復も命ぜられたことがわかる。

これをうけ百済寺では、すぐさま復興の活動が開始されたものと思われる。具体的な史料は欠くものの、本稿が検討の対象とする「勸進願文」の奥付が同年十一月日となっていることは、先の綸旨発給をうけて開始された同寺の復興再建活動の一つと考えて差し支えなからう。また、文亀三年の火災に関わつては、翌永正元年に伊庭貞隆から安

堵の判物が発給されており、明応の火災と同様、焼亡ののちほどなくして再建復興が開始されたことは明らかである。しかしながら、この復興活動に関係すると思われる勸進願文は、永正七年と永正十年の二回に及んでいる。再建の期間が長期に及んだことによるものか、あるいは勸進活動の進捗が芳しくなかったことによるものなのかは明確ではない。ひとまず焼亡後の復興活動の回賜を確認し、勸進願文の検討に移ろう。

## 第二章 勸進願文の分析と検討

前章で確認したように、百済寺は都合五度に及ぶ火災ののち、その都度再建が実行されてきた。そのうち明応七年、文亀三年の二度の焼亡については、複数の「勸進願文」が作成されていることからみて、勸進によって同寺復興が進められたと考えられる。本章ではその「勸進願文」の分析を通じて、同寺再建の過程をみていくこととしよう。

百済寺創建を伝える勸進願文は、現在知られているものだけでも、明応七年（一四九八）作成の「百済寺輪藏勸進願文」、永正三年（一五〇六）に作られた二点の「百済寺勸進願文」、そして永正十年（一五二三）作成の「百済寺楼門勸進願文」の計四点が確認される。<sup>17</sup> いずれの願文も、内容に多少の相違や精粗はあるものの、同寺創建の経緯やその後の歴史的な経過、勸進の趣旨などを説く点では概ね共通しており、作成された年代から見て、明応七年と文亀三年の火災の後、同寺の再建復興に際し編まれたものと考えてよい。

ところで、これら四点の勸進願文は、漢文で記されたものと、漢字カナ交じり文で記されたものの二種類がある。四点の勸進願文のうち、三点は漢文体で記されているものの、永正三年作成の「百済寺勸進願文」だけは漢字カナ交じり文で記されている。同年には漢文で記された「百済寺勸進願文」も作製されているところからみて、永正三年にはカナと漢文の二つの「百済寺勸進願文」が作られていることになる。（以後記述の都合上、それぞれ「漢文願文」、「カナ願文」と略す。）

そこでこの二つの願文を比較してみると、両願文は単に表記方法が異なるというだけでなく、願文が伝える同寺の創建年代や創建の経緯も異なるなど、いくつかの特徴が指摘できる。そこで永正三年に作成された二つの願文を例にその違いをみてみることにしよう。

まずは漢文願文である。

### 勸進沙門敬白

請特蒙十方檀那助成、遂一寺再興大願之状

右近江州百済寺者、上宮太子開闢之淨刹、觀自在尊利生之靈地也、推古天皇御宇、法興元世当初刻瑞光木、顯篤瑟之妙相於一十一面、揚成風斧、模龍雲之梵閣於三十三朝、命百済道欣、遂供養、以高麗惠慈為咒願、稱山曰釈迦山（以下略）

右は、漢文願文の冒頭、百済寺の創建について書かれた部分である。百済寺が「光木」を刻んだ十一面観音を本尊とし、高麗僧惠慈を咒願に、百済僧道欣に命じ龍雲寺を模し創建され、また山号を釈迦山と称



したことなどが記されている。記述の内容は、他の漢文願文にも共通しており、三点の漢文願文はいずれも同一系譜の願文と考えて差し支えないだろう。現在一般に伝えられる同寺創建の伝承の原型であることもいうまでもない。おそらく最も古い明応七年の願文を基礎に、それを模倣・引用の上でその後の願文が作成されたものと思われる。このため漢文願文は同一の文言や似通った部分が多い。ひとまずここでは、同寺創建が法興元世（崇峻天皇四年・五九一）の当初とされていることに注意しながら、もう一方のカナ願文を見てみよう。

# 勸進沙門敬白

請特蒙十方檀那之御助成、早遂一寺再興之大擔願狀

右江州愛智郡百済寺者、推古天皇御宇聖德太子之開闢ナリ、本尊ハ同太子之御作、八尺五寸之立像之十一面觀音ナリ、光充三年之当初山中ニ夜々光物アリ、太子問テ云、是イカナル物ソ、高麗ノ惠慈答テ申サク、彼光明ノアル山ハ釈迦如来昔シ五戒十禪持テ衆生ヲ利益シ給ヒシ処也ト云々、太子則深山ニワケ入り光明ヲ尋給フニ、是杉ノ杭ナリ、群猿來テ菓ヲ捧テ、杉ノ杭ニ供養シ行道礼拜スル事退転無シ、其時惠慈法師ノ申サク者、昔百済国ニ龍雲寺ト云寺アリ、觀音ヲ造ラン為メニ御衣木ヲ求ルニ、龍神忽ニ雲中ヨリ靈木ヲ降シテ觀音ヲ造ラシ、仍テ其名ヲ龍雲寺ト号ス、彼龍雲寺ノ觀音ノ御衣木ハ此杉ノ梢也ト云々、太子奇特ノ思ヲ成シ、彼ノ光ル木ヲ立テナカラ、十月廿一日ヨリ廿七日ニ至ルマテ一七箇日之間、手ツカラ十一面ノ尊像ヲキサミ、同廿八日ヨリ十一月

晦日ニ至ルマテ三十三日之間、百済国ノ龍雲寺ヲ模テ、御堂ヲ造リ高麗ノ惠慈ヲ以テ咒願ト為シ、百済ノ道欣ヲ以導師トシテ供養ヲ遂給ヘリ、其時太子発願云、遠聞我寺名近拝見寺塔殊経一宿輩必生一淨土、百済国ノ龍雲寺ヲ模造ルカ故ニ百済寺ト号スル也、（以下略）

右はカナ願文の冒頭で、先に見た漢文願文とほぼ同じ内容の部分にあたる。百済寺が聖德太子によつて創建された觀音の靈場であること。本尊は太子自作の十一面觀音であり、百済龍雲寺を模して建立されたことなど、漢文願文と同様の同寺創建の事情が記されている。

しかしながら、カナ願文にはいくつかの点で漢文願文と違いがある。なかでも、願文が説く百済寺創建の年代が異なっている点は、違ひのなかでも最も重要な点といえよう。先に見た漢文願文は、同寺創建を「推古天皇御宇、法興元世当初」と記していたのに対し、カナ願文は、百済寺創建の年代を「光充三年之当初」としている。漢文願文が用いた「法興元世」も、カナ願文に見える「光充」もどちらも私年号である点は共通しているものの、願文が示す同寺創建の年代は両者で違いがあることになる。

漢文願文に用いられた「法興元世」は「法興」ともいい、崇峻天皇四年（五九一）にあたる。同年号は、法隆寺釈迦三尊像光背銘文にも「法興元卅一年歲次辛巳十二月（下略）」とあるなど、他の用例も比較的豊富な私年号である。

一方、カナ願文に用いられた「光充」という年号は、「光元」とも

いい、他には「運歩色葉集」、「如是院年代記」、「橘寺縁起」に用例がみられる程度である。<sup>19</sup> 年号が示す年代は推古天皇十三年（六〇五）にあたる。つまり百済寺のカナ願文に用いられた「光充」という年号は、「光充」の使用例としては極めて珍しく、最古の用例に近いことになると思われるが、最古か否は別にしても、カナ願文に特殊な年号がわざわざ用いられていること自体、カナ願文の特異性を示したものと考えられよう。

この、願文が伝える創建年代の違いをみるだけでも、一見よく似た内容を持つ両願文とはいえ、作成の経緯は全く異なった願文と考えられ、系譜の異なる願文と考えるべきである。しかしその一方で、漢文願文に記された法興というまでもなく、カナ願文の光充の用例として「橘寺縁起」があげられる点において、いずれの願文も太子信仰の広がりの中で作成されたという点は同様であり興味深い。<sup>20</sup>

こうした点に注意しながら今一度先掲の両願文の冒頭部分を見てみると、カナ願文には、漢文願文には記されていない内容が含まれている点が認められる。

例えば、本尊である十一面観音立像が「八尺五寸」であること。あるいは山中で夜々光を放っていた杉の「霊木」を太子自らが立木のまま彫造したこと。さらには百済龍雲寺の霊木を龍が彫造したとの伝承により百済寺が百済龍雲寺を模し、寺号も「百済寺」としたことなど、創建に関する詳細な描写はカナ願文にのみ記されているものである。こうした違いをみれば、両願文の相違が漢字とカナという単なる表記の違いなどでないことは明らかであろう。もちろん、両者には内容の

相関関係はあると思われるが、カナ願文が伝える様々な逸話は、漢文願文の内容をより詳細に説話調の文体で彩ったものといえ、両願文が異なる種類の願文であることは明らかであろう。

### 第三章 願文の相違と再建活動

さて、漢文とカナ二つの願文が異なった性格のものとするならば、次にはそうした違いがいかなる事情によつて生じたのか、という点が問題となる。つまり、異なった二つの願文がなぜ作成される必要があったのか、二つの願文の違いはなぜ生じたのかということである。そのためには、願文そのものについて、さらには願文を用いて進められた百済寺の勧進のありようをもう少し詳しく考えてみる必要があるだろう。

火災による焼亡という事態をうけ、百済寺で進められた再建の諸活動は、一山全体の重要な問題であつたといえ、それは実際の活動、すなわち勧進が一山全体で集約的に進められたことを必ずしも意味しない。もちろん当時の百済寺の規模がどの程度であつたのかという問題は残されるものの、前述いたように百済寺が複数の僧院を有していたならば、山内の諸僧院が時には協力し合いながら、また時には独自に進めたと考えるほうが自然であろう。こうした再建の活動が想定されるうえにおいて、再建の根幹をなす勧進活動に必要な勧進願文の作成は、どの僧院が担つたのだろうか。それを考えるためには、上述した異なる二つの百済寺勧進願文の生成に際して、勧進願文の基とな

った縁起、もしくはそれに類する史料群の管理が、どの僧院によって行われたかが重要な手がりとなるだろう。それを考えるためにも、今一度永正三年の二つの勸進願文に立ち返って検討してみよう。

まず、永正三年の漢文願文には、「学徒禪侶臨而斷腸、国老村民来而落涙」など、回祿によつて寺僧や国老・村民が嘆き悲しむ様子が記されている。またそれに加え、百済寺の焼亡により、「仏法（が）破滅」し、老若学僧が田里に逃亡し、寺僧が「聚落」に避難したことを伝えている。つまり漢文願文は、百済寺の回祿を、単に同寺のみの被害として喧伝するのではなく、同寺を含んだ当地域全体の人災として受け止めていることが看取できよう。

さらに願文の後半部分では、欽明・用明天皇の治世の後に、「正徳聖霊」が仏法を弘めて以来、「枝葉朝之梢」を照らすがごとく、その法水が「豊葦原之浪」に滂流し、ついには「守屋逆臣」を破り「仏家怨敵」を降伏し、千三百人の僧尼を度して、四十六箇の伽藍を開いたことなど、すべてが「太子遺徳」と述べられている。そしてその上で、「極楽浄土之一生補処」、「娑婆世界之施無畏」など様々な観音菩薩の功德が説かれ、「太子ノ冥助」によつて「蓬萊万歳之寿算」、「後生善処之時」に観音の来迎に預かり「蓮台九品之託生」に致すなど、「種々諸悪趣之利益」が「黄壤」に資するとする。漢文願文では、願文を用いて進められる勸進は、聖徳太子以来の「遺法の流布」を果したためのものと位置づけられており、そのため聖徳太子の事績が説かれているのである。

こうした内容が、仏教に対する相当の理解、あるいは聖徳太子の事

績や仏教伝来期のわが国の歴史についての基本的な知識が前提とされていることはいままでもないだろう。その上願文自体が漢文で記述されているとなれば、この願文が対象としていたのは一般衆庶であつたとは考えがたい。漢文の識字が可能な人々を対象に、漢字や漢文自体が持つ視覚的・詩文的な効果により、願文を眼前にした者の仏教や歴史といった知識に直接訴えかけるねらいがあつたと考えるべきだろう。

もちろん漢文願文には、勸進が「勸進表章（標章か）」を捧げて、「隣里郷党」を巡り、「奉加甄録」を披く、「士農工商」に向けるとする記述もみられるが、こうした部分は実際に地域に生活する村人などに対するものというよりは、当地域を治める為政者に向けてのものと考えることも可能であろう。願文が求めた勸進への奉加・協力は、同寺再建と仏法興隆を目指す一方で、地域の安寧を求める意図も込められているとみるべきなのである。

このようにとらえるならば、漢文願文が対象としたのは、百済寺を含む湖東地域を統治する守護六角氏や在地の有力層、さらには京都に住まいする貴族層であつたことは想像に難くない。当該期、守護が勸進帳に署名した例や、貴族層が寺院の再建や修造に際して勸進願文を揮毫したりする例は枚挙にいとまがない。時代は下がるものの、近江守護六角氏も、天文年間には六角定頼が龍王寺（蒲生郡）勸進帳に署名したり、勢多橋の勸進に協力したことが知られる。漢文願文によつて進められた勸進は、これらの例と同様の性格と考えて差し支えないだろう。

一方、カナ願文は、全般にわたり様々な事象が詳細に、かつ平易に



記述されている点で特徴的である。先述したように、カナ願文における同寺創建の経緯は微細に及んでいたが、詳しいのはなにも創建に関する部分に限った話ではない。

例えば、勸進に応じ、奉加を行った人たちがどのような功德を得られるのか、カナ願文は極めて具体的に記述している。奉加を行った人々には、「寿命長遠」、「子孫繁昌」がもたらされ、「五穀万菓八田々ニ熟ス」と説くほか、臨終に際しては十念により観音菩薩が蓮台を捧げ、勢至菩薩によって引接されて「二十五有穢惡ノ娑婆」を離れて「四十八願莊嚴ノ浄土ニ」参ることが約束されると述べる。漢文願文では、同様の部分の記述が「蒙太子冥助、保蓬萊万歳之寿算、後生善処之時預観音之来迎」と、抽象的に記されていたのとは対照的といつてよからう。

さらにカナ願文では、漢文願文にあった太子の詳しい事績に関する記述が大幅に削られている点も注目できる。願文のなかで、太子について述べているのはあくまでも勸進によって造立を目指す十一面観音像との関わりについての記述だけであり、むしろ本文全体では観音の靈験が強調されている。

しかしながら、カナ願文では太子と百済寺の関係が軽視されているかといえ、決してそうではない。カナ願文に特徴的なのは、太子と観音の関係を、観音菩薩の垂迹たる太子という形で記している点にある。

カナ願文では、太子は観音の化身であり様々な功德をもたらす存在とする一方で、太子のもたらす功德は観音の靈験と主張している。そ

こに太子の詳細な事績は必要ないばかりか、両者を結びつける複雑で高度な理解は、願文の主張を伝わりづらくすることにもつながりかねない。カナ願文は、太子と観音の関係をごく単純に説明しながらも、百済寺再建の勸進を、古代推古朝における厩戸王子の説話と結びつけているだけなのである。おそらくカナ願文作者の、願文に対する理解を高める工夫だったのであるまいか。

そして今ひとつ特筆されるカナ願文の特徴は、「一百万反ノ念仏ノ札ヲ賦リ与ヘテ」との記述がみられる点である。カナ願文には、記述の内容と関わって念仏往生の札を賦札するという、勸進の具体的な姿が示されているのである。これこそがカナ願文の最大の特徴であり、漢文願文には見られない点といえまいか。こうした特徴が、カナ願文をもとに進められた勸進において大きな意味を持ったことはいうまでもない。

願文に接した者の識字能力を問わず、聞くだけでその内容についての具体的なイメージが描けるよう工夫された文体。個人の救済や信心を直接的に誘う文言。次いで勸進に応え奉加・助勢を行った者への結縁が現実の行為として意識できる「念仏往生札」の賦札。これこそがカナ願文であり、カナ願文によって進められた勸進の姿なのであろう。

こうした勸進が、先にみた漢文願文によって進められる勸進と異なり、地域社会での地道な活動を中心とした勸進であったことは容易に想像できよう。カナ願文を用いて行われる勸進は、「男女ノ結縁ヲ勸メンカ為ニ花ノ洛ヨリ草ノ巷ニ至ルマテ、或ハ家々ニ至リテ一紙半銭ノ奉加ヲ乞ヒ、或ハ門々ニ竹ミテ在俗出家ノ合力ヲモトム」ものであ

り、巨額の資金を奉加する大檀越の助勢を期待したものではない。漢文願文において説かれた仏教に対する知識や聖徳太子の歴史についての理解を十分に持たない人々、日々の生活に汲々としながらも現世の幸福と来世での極楽往生を願う人々こそがその対象であった。願文が説く「蚊ノ声聚集メテ雷ヲナスト云事アリ。縦ヒ一博ノ玉精ナリトモ敢テ恥ルコトナカレ、蟻ノ土運テ塚ヲ積ト云事アリ。縦ヒ一囊ノ金文ナリトモ是ヲ輕スヘカラス」との文言は、そうした勸進の性格を如実に示しているといえよう。

このように百済寺の勸進からは、湖東地域を統治する守護六角氏や在地の有力層、さらには京都に住まいする貴族層を対象とした勸進と、在地における布教活動とあいまった形で進められた勸進という、異なる性格の二つの勸進が看取できよう。既に述べてきたように、こうした勸進活動の違いが願文の違いとなって現れたことはいうまでもないが、この違いは単に願文の違いにとどまることはなかったと考えられる。

ところで、こうした願文の違いは、勸進活動の違いを示しているだけでなく、それは願文の作成主体の違い、すなわち百済寺内部における勸進を担った組織の違いをも反映しているとは考えられないだろうか。

例えば、漢文願文の内容は、上述した永正三年の願文だけにとどまるものではない。永正三年の漢文願文同様の記述は明応七年作成の輪藏勸進願文にも、さらには永正十年作成の樓門勸進願文にもみられる。こうした点からいえば、漢文願文が記す内容は、当該期の百済寺にお

いて伝統的に引き継がれてきた百済寺自らの歴史についての理解であったと考えてよいのではないか。いわば漢文願文に記された内容は、百済寺自身が考える創建や功德など同寺縁起の根幹をなす部分といえ、その内容を生成・管理したのは百済寺本堂を中心とした学侶集団以外には考えがたい。

一方、容易な表記や念仏札の賦札など、在地に生活する人々に向けられたカナ願文は、その作成にあたり実際の布教活動が想定されている。おそらくは学侶による縁起（漢文願文）を巧みに組み替え、地域での勸進・布教活動のため生成されたのではないだろうか。とすればカナ願文の制作者は、在地で実際に衆庶に向き合った宗教者集団とみるべきであり、具体的には、太子殿とそこを根拠に活動する僧侶らを想定すべきであろう。

先掲の明応七年（一四九八）「百済寺衆徒等申状」では罹災した殿舎が判明するが、そこには本堂や常行三昧堂・阿弥陀堂・五重一切経輪藏に並んで「太子殿」があげられている。史料的な制約もありその詳細は不明なもの、通常であれば太子殿には太子像が祀られ、太子に関する詳細な事情を記した記録も備わっていたはずである。

当該期の同寺において、すでに太子殿が同寺伽藍の一角を形成していること自体、同寺自身が太子との関係を確固たる認識として形成していたことにほかならず。同寺は観音の寺であると共に、太子ともつながりを持った寺でもあった。これこそが貴賤の耳目を集めた百済寺の性格であったといえるのではないだろうか。

## おわりに ―まとめにかえて

これまでの検討を通じて、現在百済寺が伝えている聖徳太子との深い関わりを示す寺伝が、室町時代後期の同寺再建復興の過程で確立していく様子をみてきた。

再建にあたっての募縁が、本尊である観音にとどまることなく、「聖徳太子之開闢」たる百済寺に対して求められているところをみて、こうした同寺の創建伝承が太子信仰の影響のもと作成され、創建譚として成立したことは確実と考えられる。

しかしながら、百済寺が位置する湖東地域には、観音正寺（蒲生郡）や石馬寺（愛知郡）など創建伝承に聖徳太子との関わりを説く寺院がいくつが存在するばかりか、それら寺院では、個性的な逸話が語られ、それぞれの寺院と太子との間に特別な関係があったと伝えられている。

それらの各寺院の逸話や創建譚は、一見したところ相關関係は希薄であり、それぞれが別個に成立したかのような印象をうける。しかし実際のところは、創建譚の成立自体、近江あるいは湖東地域における太子信仰の広がりや影響のなかで成立してきたと理解すべきであり、大枠では百済寺と同質の原理で考えることが可能だろう。創建譚の相違はあくまでも太子信仰の定着過程での違いが現れたものと考ええるべきであろう。

さらに太子信仰の広がりという点でいえば、百済寺が山門と関わりを有していたことから、当該期における山門の主張が、百済寺にも取

り入れられた可能性も十分に想定できよう。

それまで貴紳層による信仰に偏りがちであった百済寺にとって、太子との関わりは、信仰を衆庶へと広げる魅力的な教えでもあった。それまで主たる檀越であった貴紳層からの喜捨が期待できなくなる室町期、寺院存続の危機ともいえる罹災直後に寺と太子との関わりが強く主張されるようになった背景には、こうした事情を想定することができるのではないだろうか。

### 〔注〕

(1) 中ノ堂一信『中世勧進の研究』（法蔵館、二〇一二年）、豊島修「寺社造営勧進「本願」研究の現状と課題」、木場明志「本願寺造営・再建における勧縁募財調達システム」いずれも（豊島修・木場明志編『寺社造営勧進・本願職の研究』、清文堂出版、二〇一〇年）。

(2) 創建譚自体はあくまでも伝承であり、その内容が史実か否かを検討することにさほど特別な意味はない。しかしながら、創建譚が創出時点での状況を反映していると考ええる立場からいえば、創建譚にいかなる逸話（それが史実か否かは問題ではない）が含まれているかは、創建譚創出の事情を考えるうえで重要な意味を持つ。本稿で主に対象とした勧進願文でいえば、百済寺創建には百済僧道欣、高麗僧惠慈の両名が関わったとされているが、このうち道欣については、『日本書紀』推古天皇十七年（六〇九）四月条に、百済僧道欣らが葦北津に漂流してきたことが筑紫大宰から報告されており、道欣が同十四年にされる同寺の創建に関与する事ことは明らかであり、願文の内容が史実ではない。なお、願文全般に関する基本的な考え方については、工藤美和子『平安期の願文と仏教的世界観』緒言（佛教大学研究叢書、思文閣出版、二〇〇八年）が適確かつ明瞭にまとめている。

(3) 「観智院文書」三二

- (4) 『源平盛衰記』巻三十（塚本哲三編『源平盛衰記』（国民文庫、有朋堂文庫、一九二七年）。
- (5) 『華頂要略』五五上（『天台宗全書』、大蔵出版、一九三六年）。
- (6) 『華頂要略』五五上
- (7) 東京大学史料編纂所蔵影写本。
- (8) 若宮神社（滋賀県高島市）所蔵。
- (9) 『無量寿院大般若経』五三九巻
- (10) 『無量寿院大般若経』四四七巻。
- (11) 『大乘院寺社雜事記』明応元年八月二十二日条。
- (12) 東京大学史料編纂所蔵影写本「百済寺文書」
- (13) 『後法興院記』文亀三年四月五日条、「公方両将記」上（『続々群書類従』四）、「応仁後記」（『改訂史籍集覧』）。
- (14) 『信長公記』（史籍集覧本、一九〇一年）。
- (15) 東京大学史料編纂所蔵影写本「百済寺文書」
- (16) 東京大学史料編纂所蔵影写本「百済寺文書」
- (17) 「百済寺文書」。以下、「願文」の引用はいずれも同文書による。なお、願文の全文については、「百済寺資料」（『東近江市史 愛東の歴史』第一巻 資料編（東近江市、二〇〇八年）を参照されたい。
- (18) 久保常晴「我国における私年号に関する二三の問題」（『立正大学文学部論叢』十一号、一九五九年）。
- (19) 「天正十五年本運歩色葉集」（『古辞書研究資料叢刊』十二巻、大成社、一九九六年）、「如是院年代記（建仁寺年代記）」（『群書類従』雑部）、「橘寺縁起」（『大日本仏教全書』寺誌叢書二）
- (20) 石田茂作「百済寺院と法隆寺」（朝鮮学会『朝鮮学報』第五号、一九五三年）、松本真輔「橘寺の略縁起と聖徳太子伝」（石橋義秀・菊池政和編『近世略縁起論考』和泉書院、二〇〇七年）

（かい ひでゆき 歴史学科）

二〇一三年十一月十五日受理